

ISBN978-4-89476-424-8

C3080 ¥5600E

定価 5600 円 + 税



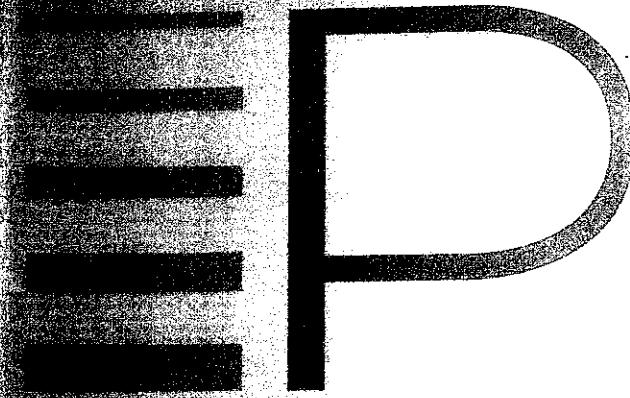
9784894764248



1923080056004

プロ
フィ
シェ
ン
シー
と
日
本
語
教
育

*Proficiency in Teaching Japanese
as a Second Language*



*Proficiency in Teaching Japanese
as a Second Language*

プロ フィ シェ ン シー と 日 本 語 教 育

2009年 ひつし書房

編者 山内博之 堤良二



- Paikeday, Thomas M. (1985). *The Native Speaker Is Dead!* Toronto; New York: Paikeday Publishing Inc. [松本安弘・松本アイリン(訳)(1990)『ネイティブスピーカーとは誰のこと?』丸善]
- Taylor, David S. (1988). The meaning and use of the term 'competence' in linguistics and applied linguistics *Applied Linguistics* 9-2: 148-168.
- White, Lydia and Genesee, Fred. (1996). How native is near-native? The issue of ultimate attainment in adult second language acquisition. *Second Language Research*, 12, 233-265.
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001). 『ACTFL-OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る—』アルク.
- 村野井仁(2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
- 柳瀬陽介(2006). 『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察—英語教育内容への指針—』溪水社

第3章

『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉える オーラル・プロフィシエンシー

宇佐美まゆみ

1. はじめに

本章の論点は、2006年6月に開催された南山日本語教育シンポジウムの「プロフィシエンシーと日本語教育—日本語の総合的能力の研究と開発をめざして—」における以下の3つの「共通課題」に、「談話研究」の観点から答えることをきっかけにして発展させてきたものである。

- (1) 談話研究から考えて「プロフィシエンシー」とは何か?
- (2) その考え方に基づくと、どのような研究が必要で、且つ、可能か。また、そのためにはどのような能力開発が必要で、且つ、可能か?
- (3) 上記の考えはこれからの日本語教育、とりわけ、日本語の会話能力の研究・開発にどう貢献するか?

本章では、これらの問いに改めて答えながら、「談話研究の視点から捉え直したプロフィシエンシー」の新たな観点を提示したい。

南山日本語教育シンポジウムの「プロフィシエンシーと日本語教育—日本語の総合的能力の研究と開発をめざして—」という題目の副題(2006)にあるように、「プロフィシエンシー¹とは、言語運用の総合的能力のことを指す」ということについては、ある程度、共通理解ができていていると考えられる。もし、そうであるとするならば、プロフィシエンシーの「研究と開発」

のためには、自然会話データにおける「言語運用の総合的分析」に基づく「談話研究」の視点を生かすことが不可欠であるというのが、談話研究の実践と成果に基づく筆者の考えである。

宇佐美(2006b, 2008)は、談話研究の成果を踏まえて、「オーラル・プロフィシエンシー」を、「伝達意図の達成度」「ボライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」の3つの観点から複合的に捉えることを提案している。本章では、この3つの観点について、幾つか例を示しながら、「オーラル・プロフィシエンシー」の新たな捉え方を示す。また、プロフィシエンシーをこの3つの観点から捉えることによって、日本語の会話教育に何が示唆できるのかを論じる。

2. 談話研究の成果に基づく視点を生かした「プロフィシエンシー」の捉え方

まず、シンポジウムの共通課題における問いの「(1)談話研究から考えて『プロフィシエンシー』とは何か?」について考えるために、ACTFL Oral Proficiency Guidelines に見る「プロフィシエンシーの定義」を整理しておく。

2.1 ACTFL Oral Proficiency Guidelines に見る「プロフィシエンシー」の概念

鎌田(2000: 18-19)によると、ACTFL Oral Proficiency Guidelines に見る「プロフィシエンシー」の概念は次のとおりである。

4大構成素:

(1) 機能/タスク(function/task)遂行能力:

- a. 「活動(タスク)」そのものとそれが持つ「機能」を果たす能力
- b. 常々繰り返され、単に「習慣的」あるいは「ストレート」に行われる活動であればあるほど遂行能力は低くてもよい。しかし、意味交渉によじれがあり、予期しない(慣れていない)活動や、相手の立場や、第

3者(あるいは、架空のもの)の立場に立つことを要求する活動(例えば、説得をすること)の遂行にはより高度な能力が必要となる。

(2) 場面/内容(context/content)処理能力:

- a. 「活動」の「内容」と「活動」が置かれている「言語環境(場面)」を処理する能力
- b. 話者にとって身近な場面・内容であればあるほど処理しやすく、話者自身から疎遠な場面・内容であるほどより高度の処理能力を要する。

(3) 正確さ(accuracy)生成能力:

- a. 「活動」を言語化する能力(文法、発音、語彙、語用論的能力、社会言語学的能力、流暢さ)
- b. 話者自身にしか理解できない「正確さ」から目標言語を母語とする話者に何ら違和感を感じさせない「正確さ」までの範囲。

(4) 談話(text)構成能力:

- a. 他の3能力を総合的に駆使し、テキストを作り上げる能力
- b. 発話を分解不可能な塊(unanalyzable chunk)としてしか構成できない低い能力から、文レベル~文章レベル~複文章レベルの談話生成が自発的に可能になる高度な能力までの幅。

また、鎌田(2005: 314-315)では、「ACTFL Oral Proficiency Guidelines の骨格」として、“proficiency”について以下のように述べている。

- a) “proficiency”とは機能的言語能力(functional language ability)のレベルを示すものである。つまり、実際の生活において、どのような言語活動がどれほどできるかを示すものである。
- b) “proficiency”のレベルは当該の言語活動そのものが遂行される際に必要となる次の3要素の総合的評価で決定される: “function/task”(機能/タスク)、“context/content”(場面/内容)、“accuracy”(正確さ)。(但し、1989年から“text type”(テキストの型)という要素も加えられている。)
- c) 当ガイドラインは、1950年代に政府機関であるFSI(外交官語学養成所)が使用していたものを一般教育機関用(academic purpose)に置き換える

ことからその開発が始まった。

- d) “proficiency”のレベル設定はFSIのスケールがそうであるように、全く機能的能力のない場合を最低に、そして、母語話者の能力を最高に設定して、その間をNovice、Intermediate、Advanced、Superiorの4段階に分ける。
- e) 当ガイドラインは単一の外国語教育理論から成立しているのではなく多くの草の根的活動に端を発した様々な研究の産物である。(Hadley, 2001: 11)

これらを見ると、ACTFLのプロフィシエンシーの捉え方は、「どのような言語活動がどれほどできるか」というタスク処理能力を重視した機能的言語能力(functional language ability)に重きをおいていることがわかる。また、その機能的言語能力の4大構成素として、(1)機能/タスク(function/task)遂行能力、(2)場面/内容(context/content)処理能力、(3)正確さ(accuracy)生成能力、(4)談話(text)構成能力が挙げられている。しかし、同じ言語活動を正確に行うにしても、その表現方法は、様々である。その点を考慮した、表現の「正確さ」だけではない、表現の「洗練度」ということや、「対人コミュニケーション能力」としての「ポライトネス」については、あまり考慮されていないように思える。そのため、これらについて、次項で論じていく。

2.2 プロフィシエンシーを評価する3つの観点—「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」

宇佐美(2006b, 2008)では、機能的言語能力を重視する点は尊重した上で、談話研究の成果に基づく新たな視点からプロフィシエンシーを考えると、ACTFLのプロフィシエンシーの概念に欠けているものとして、「対人コミュニケーション能力」としての「ポライトネスの適切性」という観点と、言語表現法自体の「洗練度」という概念が挙げられるとしている。そして、「オーラル・プロフィシエンシー」を、以下の3つの観点から複合的に捉えることを提案している。

- (1) 伝達意図の達成度²: 当該言語において意思疎通ができる能力
- (2) ポライトネスの適切性: 当該言語における意思疎通や感情のコミュニケーションが、対人関係的観点から円滑に行える能力
- (3) 言語行動の洗練度: 当該言語・文化において洗練されているとみなされている言語行動ができる能力

以下に、この3つの観点について、より具体的に解説していく。

(1)の「伝達意図の達成度」は、文字通り、自分の意図をどのくらい正確に相手に伝えられたか、また、相手の意図を理解できたかの度合いである。レストランで、「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」と言っても、「水、おかわり」と言ったとしても、おかわりがもらえたとしたら、どちらも「伝達意図の達成度」は、同様であると考えられる。もう少し複雑な談話レベルのやりとりを通して意図を伝える必要があるようなコミュニケーションで、意思疎通がスムーズに進んだ場合は、「伝達意図の達成度」は高く、逆に、途中で行き詰まりや誤解が生じたりして、なかなか相手にうまく意図を伝えられなかった場合は、その誤解や行き違いの度合いに応じて、「伝達意図の達成度」の評価を行う。

(2)の「ポライトネスの適切性」は、「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2002, 2003b, 2008)の枠組みで「ポライトネス」を捉えるものであり、話し手側の、当該の言語行動のフェイス侵害度の見積もりに基づく「ポライトネス・ストラテジー」と、話し手と聞き手の種々の「見積もり差(De値)」から生まれる「ポライトネス効果」を区別して考える。「ポライトネスの適切性の判断は、『相対的』なものとして捉える」というところが、従来のポライトネスの捉え方や評価基準とは大きく異なる点である。以下に、「見積もり差(De値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」の関係をまとめたものを、図1として示しておく³。ディスコース・ポライトネス理論の考え方を、プロフィシエンシーの「評価」に適用する場合は、既に行われた話し手の言語行動の評価であるため、予測ではなく、聞き手側の捉え方を重視した「ポライトネス効果」の観点から「ポライトネスの適切性」を判断することになる。

De値	-1	$-\alpha$	0	$+\alpha$	+1
	\longleftrightarrow		\longleftrightarrow	\longleftrightarrow	
見積もり差(De 値)の範囲	$-1 \leq De < 0 - \alpha$	$0 - \alpha \leq De \leq 0 + \alpha$	$0 + \alpha < De \leq +1$		
行動の適切性	過少行動(例: 粗野)	適切行動(適切)	過剰行動(例: 慇懃無礼)		
ポライトネス効果	マイナス効果 (失礼、不快)	プラス効果(快) ニュートラル(中立)	マイナス効果 (失礼、不快)		

見積もり差(Discrepancy in estimations: De 値)*: $De = Se - He$

Se: 話し手(Speaker)の「見積もり(estimation)」。仮に、0から1の間の数値で表すものとする。

He: 聞き手(Hearer)の「見積もり(estimation)」。仮に、0から1の間の数値で表すものとする。

α : 許容できるずれ幅

*「見積もり(estimation)」には、以下の3種がある。

- ①「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積もり
- ②「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図1 「見積もり差(De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

先の「水」の例に戻ると、音声的な特徴の影響は、とりあえず議論を簡単にするためにしておくとしても、同じように「水、おかわり」と言っても、日本語の母語話者でないことが明らかな人が、一生懸命考えながら、やっと「水、おかわり」と言った場合と、日本語母語話者が、少々えらいような態度で「水、おかわり」と言った場合では、聞き手側から見た「ポライトネス効果」は、異なると捉える。つまり、前者は、当該場面でどのくらいの言語表現が適切であるとみなすかという「行動の適切性」についての聞き手と話し手の「見積もり差(De 値)」は、許容範囲内となるが、後者は、「見積もり差(De 値)」の範囲が許容範囲を超え、マイナス効果を生むこともあり得る。つまり、見積もり差の「許容できるずれ幅(α)」は、一般に、母語話者に対してよりも、日本語の運用能力の低いいわゆる初級・中級の日本語学習者に対してのほうが、大きくなると仮定できる。つまり、「水、おかわり」という発話や、「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」という発話の「ポライトネスの適切性」は、文レベルの表現の丁寧度としてだけでなく、

談話レベルから見た文脈や、話者の属性(母語話者か非母語話者か等)までも含む、様々な要因を考慮して相対的に捉えるのである。

このように、ディスコース・ポライトネス理論の原則で考えると、「ポライトネス効果」は、相対的に決まってくるため、当該の言語行動の話し手と聞き手の「見積もり差(De 値)」が許容範囲内に入っている場合は、その「言語形式自体の丁寧度」にかかわらず、基本的にその言語行動は、少なくともお互いにとって「適切」だということになる。より厳密に言うと、話し手と聞き手の「見積もり差(De 値)」が0に近いほど、聞き手と話し手の期待する言語行動が一致しているということである。また、「許容できるずれ幅(α)」が、 $+\alpha$ であれば、表現自体の丁寧度は高く、 $-\alpha$ であれば、表現自体の丁寧度は低いということになる。また、見積もり差が許容範囲($\pm \alpha$)を超えた場合は、当該の有標行動の「有標性」が高い、つまり、「当該場面で期待される一般的な行動」からの乖離の度合いが大きければ大きいほど、「マイナス効果」の度合いも大きくなると考えられる。このような「ポライトネス効果」の相対的な捉え方は、「ディスコース・ポライトネス理論」の原則に基づくので、詳しくは、宇佐美(2003b, 2008)を参照されたい。

ここでは、理論の詳細には踏みこめないが、「プロフィシエンシーの評価」という観点から言うと、極端に言えば、先の例の日本語母語話者の「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」も、初級日本語学習者の「水、おかわり」も、「ポライトネスの適切性」という観点からは、どちらも「適切」、或いは、「許容範囲内」とであると捉えることができる。ただし、その場合も、この「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」と「水、おかわり」には表現上の違いがあるわけであるが、それは、次の「言語行動の洗練度」の問題として扱うことになる。

プロフィシエンシーの評価をする際の「ポライトネスの適切性」とは、従来とは全く異なる「相対的」な観点からポライトネスを捉えるもので、「適切なポライトネス」を段階づけ、評価し、それに合わせるように「指導」していくという捉え方ではなく、逆に、相対的な「ポライトネスの適切性」の観点から、現実の円滑なコミュニケーションに支障をきたしかねないものをまず取りあげ、言語教育上優先的に扱っていくという考え方になる。重要な

点は、基本的に、当該の言語行動が聞き手の捉える「行動の適切性」の許容範囲内に入るものなのか(これを「適切」と呼ぶ)、許容範囲を超えてしまいマイナス効果を生んでしまうものなのか(これを「不適切」と呼ぶ)という2つの区別である。相対的なポライトネスの適切性は、相手や場面、コンテキストに応じて個別に判断されるものである。一般的な教材では扱えないものである。そこで、このような「コミュニケーション教育」のためには、談話研究のデータでもある「自然会話」が、貴重な教材となるのである。ここで言う「不適切」と判断される言語行動には、慇懃無礼や、学生が友達に敬語を使うなど、場面や相手にそぐわず「丁寧すぎる表現」を使った場合なども含まれる。言語教育の観点からは、単なる言語形式の丁寧度だけの問題ではない、「不適切」と判断されるような「言語行動」をとりあげて、なぜそれが不適切なのかを説明し、理解を促すことがしやすいからである。

(3)の「言語行動の洗練度」は、文レベルの表現の洗練度(文法、発音、語彙等)と、談話レベルの洗練度(語用論的能力、社会言語学的能力、流暢さ)双方から考える。日本語においては、通常、難しい語彙や敬語が適切に使用できているということは、文レベルの洗練度が高いということになる。しかし、逆に、「明日は、都合が悪いです」よりも、「明日は、ちょっと…」のように、状況に応じて適切な「中途終了型発話」が使用できることは、当該の語彙数は少なくとも「言語行動の洗練度」が高いとみなせることもある。また、直接的に依頼だけをするのではなく、前置きやヘッジを適切に用いるというようなことも、談話レベルから見た「言語行動の洗練度」の高さとみなすことができる。

先の「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」と「水、おかわり」を例にとると、「ポライトネスの適切性」は、話者の属性や文脈などから相対的に決まってくると捉えるため、どちらが「ポライトネスの適切性」が高いか低いかは、そういうコンテキスト情報がない限り、一概には言えないことになる。しかし、文レベルの「言語行動の洗練度」については、明らかに「すみませんが、お水をもう一杯いただけますか」のほうが「洗練度が高い」と判断する。

以上、プロフィシェンシーの3つの観点の捉え方について、概観した。会

話教育の観点からは、「言語行動の洗練度」を高めていくということが、語彙の豊かさや、複雑な敬語が使えるということなども含むため、従来の学習内容や学習レベルとほぼ関連する中心的な課題になる。しかし、ACTFLのガイドラインにあるような機能的言語能力に加えて、あえて最後まで言わない「中途終了型発話」や会話における相互作用の能力が関係する、二人以上の話者で一文を作る「共同発話」などは、いずれも、ACTFLの評価基準では、「文」レベルに満たない「断片的発話」として評価されることになってしまう。しかし、聞き手としても会話に積極的に貢献する適切なあいづちの打ち方など、一般に、日本語に特徴的だと言われている(しかし他の言語にもある)このような言語行動が適切に行えるということも、「言語行動の洗練度」に関係する。このような「表現方法」や、「やりとりの仕方」の自然さや巧みさなども、積極的に「日本語のプロフィシェンシー」の評価に取り入れる必要がある。

「プロフィシェンシー」というものは、言語運用能力の総体として捉えられるものであり、「総合的に判断する」ことが重要である。しかし、ただ、「総合的」と言っても捉えどころがない。そこで、談話研究のこれまでの研究成果に基づいて立てたのが、以上に説明した「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」「言語行動の洗練度」という3つの観点である。

一口に「総合的なプロフィシェンシー」と言っても、内実は、これら3つの観点からのプロフィシェンシーの度合いがアンバランスな形で総合的なプロフィシェンシーが構成されていることもありえる。そういう場合も、これらの3つの観点を明確にしておくことで、そのいずれかが不十分な場合は、観点を絞った指摘や助言ができる。例えば、「明日は、都合が悪いです」という発話は、「伝達意図の達成度」「ポライトネスの適切性」とともに、致命的な問題はないが、「言語行動の洗練度」の観点からは、「他に、より洗練度が高い表現がある」というように説明し、他の表現や言い回しをいくつか提示するというような指導ができるからである。また、言葉巧みに皮肉を言うということも、「言語行動の洗練度」は高いとみなすことになる。ただし、この場合、「ポライトネスの適切性」は、(相対的に決まってくるとは言え)許容範囲外になる可能性も高いと考えられる。

現段階では、これら3つの観点の基準の表し方(例えば、1から10までの点数、或いは、いくつかの段階で表すのか等)は、図1に示した「ポライトネスの適切性」の捉え方以外は未定であり、今後、検討していきたい点である。今のところ、「伝達意図の達成度」については、話者の意図がどのくらいスムーズに相手に伝わったか、また相手の意図をどのくらい正確に理解しているか等に応じて、段階づけることができると考えている。また、「言語行動の洗練度」は、従来の学習レベルの基準と相関する点が多いので、それらをベースに、先にあげた「中途終了型発話」や「共同発話」、「適切なあいづち」などの言語行動をより具体化して、レベル分けしていくことを考えている。「ポライトネスの適切性」については、図1「行動の適切性とポライトネス効果」にまとめられた原則で捉え、とりあえずは、「マイナス効果」を生みうる表現や言語行動を抽出し、なぜ、マイナス効果を生みうるのかの説明を加えて理解を促すという適用の仕方を考えている。

このような捉え方の実際の言語教育への応用について考える前に、次節では、まず、この3つの観点から教材用に創作された会話と自然会話のやりとりを簡単に比較・分析することによって、この3つの観点の捉え方をより具体的に示すとともに、自然会話を分析するからこそ明らかにってくる新たな「プロフィシエンシー」の要素を例示する。

3. 談話研究の観点からの会話の分析例

本節では、シンポジウムの共通課題の(2)の「談話研究の考え方に基づく」と、どのような研究が必要で、且つ、可能か。また、そのためにはどのような能力開発が必要で、且つ、可能か？」に答えるべく、いくつかの分析例をあげながら考えていく。

プロフィシエンシーを、「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」という3つの観点から捉え、日本語学習者のプロフィシエンシーをそれぞれの観点から高めていくには、まずは実際の自然会話のやりとりを、これらの観点から分析してみることが必須である(Usami 2005)。以下では、自然会話の特徴を明らかにするため、教材のために作ら

れた会話と自然会話とを比較しながら分析し、そこから得られる自然会話の特徴を示す。そして、それらをいかに今後の会話教育に生かすことができるかについて論じる。

3.1 教材のために作られた会話と自然会話の比較

ここでは、自然会話の特徴をより明確にするために、教材のために作られた会話と自然会話の比較分析を行う。

3.1.1 創作会話—図書館での問い合わせ(母語話者)

以下は、東京外国語大学のTUFSS会話モジュール⁴における、「質問の仕方」を学習項目とした「時間について尋ねる」というスキットを文字化したものである。それぞれの発話の右側に、ポイントとして指摘できる点を挙げている。「質問」は、質問の機能がある発話、「答え」は、答えの機能がある発話である。

〈創作会話—図書館での問い合わせ(母語話者)〉

状況：学生の鈴木さんが図書館の利用について尋ねる⁵。

ライン番号	話者	発話内容	ポイント
1	鈴木	すみません。	
2	図書館員	はい。	
3	鈴木	図書館は夏休み中も開いていますか。	質問
4	図書館員	ええ、開いていますよ。	答え
5	鈴木	何時から開いていますか。	質問
6	図書館員	9時からです。	答え
7	鈴木	自習室は何時まで使えますか。	質問
8	図書館員	5時まで使えます。	答え
9	鈴木	土日也使えますか。	質問
10	図書館員	夏休み中は、土日はお休みなんです。	答え
11	鈴木	ありがとうございます。	

この会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- (1) 「質問」-「答え」の定型的なやりとりで終わっている。
- (2) 情報伝達のための「必要最低限の発話」のみで構成されている。
- (3) 前の発話を受けて次の発話を行うというよりは、聞きたいことをすべて質問しているだけである。(「答え」の発話に対する反応が一切ない。)
- (4) 実際の会話と異なり、例えば、質問や答えの内容が談話展開に応じて複雑になるというような、談話の中でタスクの難易度が変わるというようなことがない。形式も、単文のままである。

プロフィシエンシーの3つの観点から評価すると、以下のようになる。

- (1) 「伝達意図の達成度」は、高い。(無駄がないように作られている。しかし、実際の会話には、一見、無駄にもみえるようなやりとりが多々ある。)
- (2) 「ボライトネスの適切性」は、最低限を満たしている。(特に、失礼があるわけではない。)
- (3) 「言語行動の洗練度」についても、文法的誤りがあるわけではないという意味で、最低限を満たしているが、洗練度は、高くない。例えば、ライン4の図書館員の「ええ、開いていますよ」に対しては、いきなり次の質問に入る前に、「ああ、そうですか」という発話がほしいところである。また、そのあとも、教科書的な文「何時から開いていますか」ではなく、「何時からですか?」でよいだろう。つまり、ライン5は、「ああ、そうですか。何時からですか?」くらいでよいのではないだろうか。「言語行動の洗練度」の観点からは、このような相互作用性や、「何時から開いていますか」ではなく、「ああ、そうですか。何時からですか?」というような、前の発話を受けての省略が行われている言い方のほうを、より洗練度が高いと判断する。

3.1.2 自然会話1-不動産屋での問い合わせ(中級話者)

先の創作会話(図書館での問い合わせ)と全く同じ場面を自然会話データの中から選び出すことは難しい。ここでは、先の「質問する」と比較的条件が

近い、「問い合わせる」という行動が含まれている「中級話者」と「超級話者」の自然会話データ⁶を取り上げ、創作会話と自然会話の違いと、学習者のレベルによる言語行動の違いを比較する。

ACTFL Oral Proficiency Guidelines では、話者にとって、常々繰り返されている活動や、身近な場面では、あまり高い遂行・処理能力を必要としないとされているが(鎌田 2000: 18)、「不動産屋で部屋を探す」という活動は日常的に繰り返されるものではないため、高い「機能/タスク遂行能力」や「場面/内容処理能力」が求められる場面であると言えるだろう。

以下に、自然会話データの基本的な情報を簡単に記す。

表1 不動産屋での問い合わせ会話

	自然会話1	自然会話2
場面	日本語学習者が東京外国語大学周辺の不動産屋で部屋を探す	
話者	中級話者(ベトナム人)と不動産屋店員	超級話者(韓国人)と不動産屋店員
分析対象時間	4分55秒	3分33秒

以下の会話は、ベトナム人男性グエンさん(仮名)が、引越しの相談のために不動産を訪れ、はじめにアンケートに記入し、希望する地域を伝えた後のやりとりである。

先の「質問する」ことを学習項目として作られた教材の発話ややりとりと比較するため、「ポイント」という列を設け、質問の発話の部分には「質問」と記した。また、}をつけた「意味交渉のプロセス」という部分は、意味交渉が行われている箇所を示す。

さらに、ここでは、日本語のプロフィシエンシーにおいて重要な役割を果たし、且つ、短い談話からでも取り上げて例として示しやすい「スピーチレベル」について、「伝達意図の達成度」、「ボライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」の3つの観点から、グエンが「母語話者との見積り差(De値)」を「 $0 \pm \alpha$ 」の許容範囲内に収めることができているかどうかを考察する。そのため、グエンのすべての発話のスピーチレベルの適切性を、2名

の日本語母語話者が、録画ビデオを見ながら母語話者の自然な感覚で評定して、評定者間信頼性係数を算出した($\kappa = 0.79$)⁷。各発話の右側に「スピーチレベル」の列を設け、スピーチレベルの使用が自然な場合は○、不自然な場合や失礼に感じられる場合は×を記した。また、「敬体」が必要だと判断された場合は「要」、「敬体」がなくても自然な場合は「不要」と記した。

〈自然会話 1⁸ 不動産屋にて 日本語中級話者〉

発話文番号	話者	発話内容	ポイント	スピーチレベル
67-1	グエン	/少し間/あと、あー、ん、[地図を指して]この、駅の近くに、		/ ⁹
68	店員	はい。		
67-2	グエン	スーパーマーケットがありますか?。	質問	○
69	店員	はい、[地図を指して]ここ、『丸正』っていうところと、(あー)[地図を指して]ここ、『サクラコマー』。		
70	グエン	『サクラコマー』。		○
71	グエン	あの、何の店ですか?。	質問	○
72	店員	これスーパー〈マーケットですね〉{ }。		
73	グエン	〈スーパーマーケット〉{ }、あ、そう。		←要 「ですか」 ×
74	店員	あと郵便局とか、色んなもの、ここにね(おお)、大きな車返団地‘くるまがえしだんち’っていうがあるので、ここ大きなスーパーマーケットが、ね、団地のためにあるような感じです。		
75	グエン	でも、値段はどう?。	質問	←要 「ですか」 ×
76	店員	値段は比較的、中央線に比べれば全然安いと思いますよ〉{ }。		
77	グエン	〈あー〉{ }。		○
78	店員	〈はい〉{ }。		
79	グエン	〈いくら?〉{ }。	質問	←要 「ですか」 ×

80	グエン	えっと、1ヶ月(んー)いくら?。	質問	←要 「ですか」 ×
81	店員	いくらぐらいをご希望ですか?。		
82	店員	＝一番出せる金額はいくらですか?。	母語話者の不自然な表現、フォリナートーク?	
83	グエン	ん、なんですか?。		○
84	店員	ん、家賃。		
85	グエン	あ、い、意味、家賃は?。[→]		意味交渉
86	店員	家賃の、[手を前に伸ばす]一番お金を出せる金額は、いくらまでですか?。	意味交渉のプロセス	
87	グエン	[友人のほうを見た後で]あのーえ、4せ、4万。		←要 「ですか」 ×
88	店員	4万円ぐらいですね。		
89	グエン	4万円ぐらい。	コミュニケーションの成功	←「です」 不要 (復唱)○
90	店員	/沈黙2秒/はい、4万円ぐらいで、じゃあ3万円台で探すということですよ。		
91	グエン	でも、このー(うん)、このー、お金ぐらいは(ん)、えっとー、キッチンやシャワーはどう?。	質問	←要 「ですか」 ×
92	グエン	キッチン、シャワー…。	意味交渉のプロセス	○(復唱)
93	店員	キッチン??、えー、光熱費かな??。	コミュニケーションの失敗	
94	店員	あのガスとか、電気〈とか〉{ }。		
95	グエン	〈うん〉{ }、うん。	意に反した返答	○ (あいづち的)
96	店員	うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはけません。		
97	グエン	あー、(うん)別。	意味交渉のプロセス	←「ですか」 不要 ○
98	店員	別です。		

99	グエン	えーと、あー、自分の部屋は <ない> {}。	助詞の使い 方(自 分 の 部屋「には」 ない。)	←「ですか」 不要 ○
100	店員	<そうで> {} すね。		
101	店員	え？、別の(ん)、あー、(あ)うん、例え ば、んー、ちょっと待ってね。[店員が 資料を取りに席を立つ]	意味交渉の プロセス	
102	店員	/沈黙5秒/こちらの今ちょっと多磨駅 の近くの(はい)物件なんです、ちゃん とどのお部屋にもこういうふうにお部屋 に(んー)、キッチンがあって、(はい)お トイレとお風呂がある感じがですね。		
103	グエン	あー、じゃ、全部4万。	助詞の使い 方 (全部「で」 4万。)	←要「です か」或いは、 言 い 淀 み 「…」×
104	グエン	1ヶ月4万。		←要 「ですか？」 ×
105	店員	ん、これはちょっと違いますけれども (んー)、1ヶ月4万円のところを、探す、 という形になります。	コ ミ ュ ニ ケーショ ンの成功	

※文字化の原則は、宇佐美(2003a, 2006c)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従っている¹⁰。そのため、句点「。」や読点「、」が、例えば、「？」のように、慣例的な使い方とは異なる使い方をする場合もある。文字化資料の中で用いられている各種記号の説明については、宇佐美(2006c)を参照されたい。

※また、本談話例は、オリジナル・データの途中からの抜粋のため、ひとまとまりの会話における発話文の通し番号となる「発話文番号」は、1から始まっていない。

グエンの言語行動の特徴として、以下のことがあげられる。

- (1) 「質問」－「答え」という形ばかりではなく、「答え」から発展したやりとりもみられる。
- (2) 相手からの質問に対して、なかなかスムーズには、答えられない。→「機能／タスク遂行能力」があまり高くないため、予期しない活動に即座には対応できない。
- (3) 意味交渉のねじれがおき、機能／タスクの遂行が難しくなるときがある。

プロフィシェンシーの3つの観点から評価すると、以下のようになる。

「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」は、対人関係に支障が出るほどではないが、時々、問題が生じている。また、必要なところで「ですか」を省略してしまったり、言い淀んで(BTSJ)における記号は、「…」)、発話をやわらげることなどができておらず、「言語行動の洗練度」は低いとみなすことができる。

3.1.2.1 「伝達意図」の達成度

次に、この会話のやりとりのライン75から90までの、「家賃の相場」に関するやりとりを、「伝達意図の達成度」という観点から、より詳細に考察していく。

グエンはライン79で「いくら？」とだけ聞いた後、即座にライン80で「1ヶ月いくら？」と言い直した。話の流れからは、家賃の「相場」を教えてもらいたかったと考えられる。しかし、店員は、具体的な相場については触れず、ライン81で「いくらぐらいをご希望ですか？」と尋ね、さらに次のライン82で「一番」という言葉をやや強調し、「一番出せる金額は、いくらですか？」と言い直す。店員は、「一番」という言葉で切り出したせいか、続く表現が「(お金を)出せる金額」とやや不自然になってしまっている。グエンのあまり理解できていないような表情を見て、フォリナートークになってしまったとも考えられる。

店員の発話がかえって難しい表現になってしまったことと、また、ここで質問されるとは思ってもみなかったのか、グエンは、ライン83では、「なんですか」と、とまどったように聞き返している。この後、しばらく意味交渉が続くが、店員は、「家賃」の意味を問われたのにもかかわらず、それには答えず、ライン86で「家賃の、一番お金を出せる金額は、いくらまでですか？」と、ライン82とほぼ同じ表現で、質問を繰り返す。ただ、「出せる」の部分で手を前に出すようなゼスチャーをし、ゆっくりと「いくらですか」と言うことによって、グエンの理解を助ける努力はしている。その甲斐あったか、グエンは意味を推測でき、ライン87で「4万」と答えている。ライン88の店員の確認のための復唱、ライン89のグエンの復唱で、「家賃の予

算は4万円まで」という情報を共有し、最終的には、コミュニケーションが成功したことがわかる。

グエンは、最初、「家賃」という言葉の意味がわからなかったが、店員のゼスチャーや「いくら」という既知の言葉などの様々な手がかりから、「家賃」の意味を推測し、正確に答えることに成功している。「伝達意図の達成度」の観点から見れば、質問したり復唱したりして相手の言ったことを確認するだけではなく、相手のゼスチャーを見ることによって、相手の発話の意図を推測し、コミュニケーションを成功させたといえる。これらのことから、グエンの「伝達意図の達成度」は、完璧ではないが、相手の意図を理解し、また自分の意図をなんとか相手に伝達できているレベルであると言えるだろう。また、このような相互作用によって、最初はわからなかった「家賃」という言葉の意味が理解できたという意味で、一時的にせよ、「相互作用が学習を促進した」と考えることができる。(あえて、「一時的」としたのは、「家賃」という言葉の意味を本当に「習得」したのかどうかは、厳密には、後にテストでもしない限り、確定できないからである。)

3.1.2.2 「ポライトネスの適切性」

次に、「ポライトネスの適切性」について考察する。自然会話1のスピーチレベルの評定を見ると、グエンの19発話中8発話(42%)が敬体であるべきところが常体になっており、2名の評定者から不適切であると認定されている。つまり、グエンの発話の約42%が、敬体と常体のどちらがより適切かということについての母語話者とグエンとの見積もり差(De値)が、許容できるずれ幅(α)を超えており、許容範囲内に入っていないということになる。しかし、グローバルな観点から逆の見方をすると、グエンの19発話中11発話(約58%)は、自然であると評定されているということであり、ライン67-2の「スーパーマーケットがありますか?」、ライン71の「何の店でですか?」というように、適切な場所で敬体を使用していることもあることを見ると、グエンが敬体の使用を習得していないわけではないことがわかる。

このように、グエンの発話には、ローカルな観点(詳細後述)から見るといくつかポライトとは言えない部分があるが、これには、「ポライトネスの受

け止め方の相対性」という側面が関係してくる。つまり、グエンの日本語力があまり高くないので、店員は、「ポライトネスの適切性」より、「伝達意図の達成度」を優先していると考えられる。ディスコース・ポライトネス理論で考えると、グエンの日本語力が高くないことによる「相対的認知」により、聞き手(店員)側の認知としての実際の「ポライトネス効果」は、マイナス効果にはなっていないと考えられる。換言すると、店員の「許容できるずれ幅(α)」が大きめになっていると解釈できるのである。そのため、グエンの発話に、規範的な観点からはポライトには感じにくい部分があったとしても、店員は気にせず、話はスムーズに進んでいるのである。このように、「ポライトネスの適切性」は、聞き手によって相対的に受け止められるものとして捉えられる。これらを総合的に考えると、グエンの「ポライトネスの適切性」には、致命的な問題はないと判断できよう。ただし、スピーチレベルのように、例えば、「ここでは、敬体のほうが適切である」ということが明らかなものについては、教育的観点からは、随時、指摘し指導するほうが望ましいと言えるだろう。

3.1.2.3 「言語行動の洗練度」

自然会話1のやりとりから明らかなように、グエンは、複雑な文や高度な語彙を使っているわけではなく、グエンの文レベル(表現法等)から見た「言語行動の洗練度」は、高くないと言える。しかし、敬体を使っている発話もあることから、グエンは、こういう状況(不動産屋での初めての問い合わせ)においては「敬体」が「無標スピーチレベル」であるということは、ある程度、理解していると考えられる。ただ、グエンの発話のスピーチレベルの42%が、敬体であるべきところがそうならならず、不適切だと評定されているということは、グエンは、「敬体」が無標スピーチレベルであっても、それを省略しても失礼にならない部分で省略したり、時には常体を使用する、という「グローバルな観点から見た敬体の使用・不使用」という「スピーチレベルのシフト操作」が、十分には学習できていないということになる。よって、談話レベルから見た「言語行動の洗練度」は低いと捉えられる。スピーチレベルの「シフト操作」は、グローバルな観点からしか捉えられな

いものであり、この状況においては、ポライトネスというよりも、むしろ「言語行動の洗練度」の問題として捉えられる。

先に見た「ポライトネスの適切性」が、聞き手の受け止め方によって影響される「相対性」の強いものであるのに対して、「言語行動の洗練度」は、理論的には、絶対的観点からある程度順序づけられるものである。今後、これまでの言語教育におけるプロフィシェンシーのレベルの評価基準などの成果を踏まえた上で、それらに加えて、これまでほとんど取り上げられてこなかった「自然会話に特徴的な言語行動」を学習項目に加え、それらの難易度を段階づけていくための研究が期待される。

3.1.2.4 ローカルな観点とグローバルな観点¹¹

次に、ライン91から105までの、「部屋に台所や風呂が付いているかどうか」を尋ねる際のやりとりを、ローカルな観点とグローバルな観点双方から分析する。この両方の観点から分析することによって得られることは、今後の会話教育に示唆する重要な点を含んでいるからである。

まず、ローカルな観点から「伝達意図の達成度」を検討する。ライン91のグエンの「でも、この一、この一、お金ぐらいい、えっと一、キッチンやシャワーはどう？」という発話は、家賃の話をしているという文脈から、「このくらいの部屋(3万円台の部屋)に台所や風呂は付いているか」という質問であることが推測可能である。しかし、店員にはその意図が伝わらず、店員はライン93で「キッチン？、えー、光熱費かな？」と言っている。つまり、店員には、ライン91のグエンの発話「キッチンやシャワーはどう？」だけでは、光熱費のことか、設備の有無について尋ねているということが分からなかったのである。ローカルな観点から見ると、グエンは、「どう」以下(どうですか？付いていますか？)を省略したことによって、店員と、うまく意思疎通ができなかったと解釈できる。つまり、ローカルな観点からは、この発話によるコミュニケーションは失敗していると言える。

しかし、このやりとりをグローバルな観点から見ると、ライン99のグエンの「自分の部屋(に)はない」[()内筆者]という発話が、グエンが店員の発話の意味を理解していないことを露呈させたことによって、その後の店

員のさらに丁寧な説明が誘発されたと見ることができる。ライン96で店員が「うん、そういうお金をまた別に支払わなくてはいいません」と説明したときに、グエンがライン97で「別」だけを繰り返したことから、グエンは、この時、「別」という言葉しかわからなかったのではないかと推測できる。そして、この後、ライン99でグエンが、「別」という言葉を手がかりに、「(キッチンやシャワーが)自分の部屋(に)はない」[()内筆者]と、自分なりに理解したことを自分の言葉で言い直して発したときに、店員は、はじめてグエンがそれまでの話を理解していなかったということに気づく。そこで、店員は、資料(問取り図)を取りに行き、ライン102以降で、それを見せながら分かりやすく説明したのである。そして、ライン102の店員の丁寧な説明は、グエンにとって理解可能なインプットとなったのである。このようにしてグエンは最終的には必要な情報を得ることができ、伝達意図は達成されたとと言える。

このように、グローバルな観点から見ると、ライン99の、グエンが内容を理解していないことを示す発話が引き金となって、グエンと店員との新たな「相互作用」が生じたと考えられる。そして、そのことによって、店員の説明がより分かりやすいものへと変わっていき、グエンは、結果として、理解可能なインプットを得ることができたと解釈できるのである。「相互作用が学習を促進する」ということの1つのきっかけがここに見られる。

言語教育の観点からは、このように、伝達意図を達成するために、必要なリソースを「引き出す」ストラテジーの指導も重要である。逆説的であるが、グローバルな観点から見ると、「自分が理解していること」、或いは、「理解していないこと」を相手に伝えるような「発話」は、たとえ後者(理解していないことを伝える発話)であっても、後の理解につなげる重要なストラテジーであると考えられるのである。

3.1.3 自然会話2—不動産屋での問い合わせ(超級話者の場合)

次に、学習者のレベルによる比較のために、このグエンの場面とほとんど同じ状況における超級話者の会話を分析する。

以下の会話は、韓国人男性李さん(仮名)が、引越しの相談のために不動産

を訪れ、はじめにアンケートに記入した後のやりとりである。先の自然会話1の例と同様に、「ポイント」という列を設け、それぞれの発話において、機能や特徴として指摘できる点を挙げた。例えば、『が』の終助詞的用法(が使用できている)と記したり、「日本の風呂の形式について」のように、「文化的知識を要する内容」だと示している場合もある。ライン44の「助詞の使い方」と記したところは、この会話の中で、唯一、不自然である(「今の時点では」と言ったほうがよい)と判断された箇所である。「スピーチレベル」については、先のグエンと同様に、文末に「です」が現れていない場合、それが、省略しても自然で、適切かどうかを、録画ビデオを見ながら、2名の評定者が判断した¹²。以下では、「です・ます」がない部分について、「です・ます」を省略するのが自然なところには、「省略可能」と記した。

〈自然会話2 不動産屋にて 日本語超級話者〉

発話文番号	話者	発話内容	ポイント	スピーチレベル
36	店員	はい、今回お引越しということで、お部屋探しです〈よねー?〉{ }。		
37	李	〈あ〉{ }、はい。		
38	店員	ご自身、お1人様だけですか?。		
39	李	あ、そうです。		
40	店員	はい。		
41	店員	じゃあ1部屋あればいいですね。		
42	李	そうで〈すね〉{ }。		
43	店員	〈駐車〉{ } 場は必要ですか?。		
44	李	えー、今の時点で要らない〈です〉{ }。	助詞の使い方	
45	店員	〈要ら〉{ } ないですねー。		
46	李	はい。		
47	店員	大体、場所はどのへんをご希望されて〈いますか?〉{ }。		
48-1	李	〈えとー〉{ }、学校から、		
49	店員	はい。		
48-2	李	自転車で10分ぐらいの。		省略可能
50	店員	学校から(はい)10分ぐらいのところ(はい)ですね。		

51	店員	自転車。		
52	店員	[NNS が軽くうなづく] はい。		
53	店員	と、お部屋なんですが、(はい)間取りは、和室と洋間があるんですけど。		
54	李	えーと、洋間で。		省略可能
55	店員	洋間で。		
56	李	はい。		
57	店員	はい。		
58	店員	和室は嫌‘や’ですか?。		
59	李	え、別に嫌‘いや’でもない、(〈笑い〉)い、嫌‘いや’ではないんですけども、あの、できれば〈っていうことで〉{ }。	条件付きの希望の述べ方	省略可能
60	店員	〈できれば〉{ } 洋間のほうがいいですか?。		
61	李	はい。		
62	店員	広さはどのぐらいあればいいですかー?。		
63	李	えーと、部屋の広さだけで6畳ぐらいあればいいと思うんですが。	←「が」の終助詞的用法	
64	店員	6畳ですね=。		
65	李	=はい。		
66	店員	はい。		
67	店員	お風呂トイレは?。		
68	李	えっとー【。		
69	店員	】別々のと、3点ユニットといって一緒にのタイプのものもあり〈ますが〉{ }。	日本の風呂の形式について	
70	李	〈えっと〉{ }、ユニットバスでもかまわない、です=。		
71	店員	=ユニットバスでも大丈夫〈ですか?〉{ }。		
72	李	〈はい〉{ }。		
73	店員	はい。		
74	店員	家賃によっては、って感じです〈ねー〉{ }。		
75	李	〈あ〉{ }、はい。		
76	店員	はい。		
77	店員	お部屋のある階数、1階とか2階にはこだわりあります〈か?〉{ }。		

78-1	李	〈えーと〉{}、階、その…、ん、できれば2階のほうで、		
79	店員	2階のほうがいいですね。		
78-2	李	で、あの、部屋と部屋の、その間があって、角、のほうがいいんですけども。	「けれども」の終助詞的用法	
80	店員	角部屋です〈ねー〉{}。	日本の部屋の形式について	
81	李	〈はい〉{}。		
82	店員	/少し間/はい。		
83	店員	オートロックは要らないですね?、〈特に〉{}。		
84	李	〈や、別に〉{}、〈そっちは〉{}。		省略可能
85	店員	〈はい〉{}。		
86	李	はい。		
87-1	店員	あと、お日様の関係の、向きなんです〈けれども〉{} [↑]、		
88	李	〈えっと〉{}、南。		省略可能
87-2	店員	南とか。		
89	李	はい。		
90	店員	あと東でも大丈夫ですか?。		
91	李	ん、大丈夫だと思います。		
92	店員	できれば南って〈感じで〉{}。		
93	李	〈はい〉{}。		
94	店員	はい。		

李の会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- (1) 「答え」から発展したやりとりがスムーズに行われている。
- (2) 意味交渉のねじれがおきることがない。
- (3) スピーチレベルのシフト操作(敬体の使用・不使用の切り替え)が適切である。
- (4) 「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」のいずれも高い。

中級話者と超級話者、それぞれの会話におけるやりとりを比較すると、次のようなことが言えるだろう。どちらの学習者も、最終的に得たい情報を得

ている。つまり、意思疎通はできていた。しかし、中級話者のグエンは、途中でコミュニケーションに失敗したりしながらの意味交渉のプロセスを経て、やっと情報を得ることができた感がある。そういう意味で、「伝達意図の達成度」という観点からは、超級話者の李と比べると、かなりプロフィシエンシーが低いと判断できる。

また、「ポライトネスの適切性」については、超級話者の李の場合、全く問題がない。中級話者のグエンは、中途終了型発話やスピーチレベルシフト(です・ますの使用/不使用の切り替え)を行っているが、シフトが適切ではないところが目立つ。しかし、非母語話者だということで、聞き手の許容度が大きくなっていることから、「ポライトネスの適切性」も、「大きな問題はない」と判断される。

「言語行動の洗練度」については、超級話者の李は、「(前略)嫌ではないんですけども、あの、できればっていうことで」というような中途終了型発話や、「が」や「けれども」の終助詞的用法の使い方、スピーチレベルのシフト操作などが巧みで適切である。これらのことから、超級話者の李の「言語行動の洗練度」は、かなり高いと判断できる。一方、中級話者のグエンは、スピーチレベルの適切なシフト操作などができておらず、「言語行動の洗練度」も低い。

つまり、超級話者の場合、それが超級たるゆえんであるが、「伝達意図の達成度」、「ポライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」のいずれも極めて高いと判断できる。

これら3つの観点の「度合い」の高低については、現状では、このように、レベルの異なる2人の言語行動を比較して相対的に述べるにとどまっているが、将来的には、「伝達意図の達成度」、「言語行動の洗練度」については、なんらかの基準を設定して、段階づけをしていく必要があるだろう。

3.1.4 自然会話3ークラスメートへの質問(母語話者と超級話者(2名)の3者間の会話)

最後に、日本人男性が、同じ研究室の中国人留学生(超級：女性2名)に観光名所を案内する際の3者間の会話の分析から、母語話者と超級レベルの

非母語話者の自然会話におけるやりとりに見られる「日本語の談話行動の特徴」をいくつか取り上げて考察する。

日本の観光名所の1つである箱根大涌谷の入り口から富士山を望みながら、日本人男性の松本さんが、同じゼミの中国人留学生2人(謝さんと肖さん)に大涌谷について説明している場面である。

〈自然会話3 大涌谷にて 超級話者〉

発話文番号	話者	発話内容	ポイント (案内側)	ポイント (案内される側)	備考
1-1	松本	このへんが、まあ、おお、おおー、			
2	謝	おー [NSの発話を復唱するように]。		復唱	①復唱する
1-2	松本	大涌、谷 ‘おおわくだに’。			
3	謝	だに、で 〈すか〉 { }。		復唱	
4-1	松本	〈大〉 { } 涌 〈谷で〉 { } 。			
5	謝	〈あー〉 { }、大涌谷。		復唱	
6	謝	大きい ‘おっきい’ に…[地名の漢字を確認しようとしている]。			
4-2	松本	火山の噴火口だったんだって。			
7	謝	あー、だったんですか。		確認あいづち	②確認あいづちの打ち方
8	松本	だった、うん。	確認応答		
9-1	松本	で、何て言うの？、その、かい、火口ね、			
10	謝	はい。		あいづち	
9-2	松本	火口のところで、で、そこが、今はもう噴火が終わった、終わってはいないだろうけど###埋まった感じになって、でもまだこう蒸気っていうか、			
11	謝	〈あー〉 { } [納得したように]。		あいづち	
9-3	松本	〈湯気〉 { } が、出てるっていう。			
12	謝	湯気が [↑]、まだ出てる。		確認あいづち	
13	肖	それいつも出てる…？。			③2人で質問をする

14	肖	毎〈日〉 { } []。			
15	謝]] 〈24〉 { } 時間？ =。		言い換え確認	
16-1	松本	= もう、24時間 〈どころか〉 { } 。			質問に答える
17	肖	〈24時間〉 { } 。		確認あいづち	
16-2	松本	もう、大昔から。			
18	松本	昔はほんとに、もう湯気だけじゃなくて、もう、爆発してたの、うん。			
19	肖	で、またー、さい、噴火…、〈また〉 { } []。		質問	④2人で質問をする
20	謝]] 〈復〉 { } 活っていうか、また 〈噴火は〉 { } 。		言い換え・中途終了型発話	
21	松本	〈あり得る〉 { } んじゃないの？、それは 〈笑いながら〉。			⑤質問に答える
22	肖	あり得る… 〈笑いながら〉。		復唱確認	
23	謝	あー、そうなんですか 〈笑いながら〉。		あいづち	
24	肖	あり得るんですね 〈笑いながら〉。		確認	

ここには、データのほんの一部しか示せないが、この会話の特徴として、以下のことがあげられる。

- (1) ①に見られるように、理解したことを相手に伝える機能を持つ「復唱」が多い。
- (2) ②に記したように、ライン7、8で、「あー、だったんですか」「だった、うん」というような教科書では扱われることのない「確認あいづち」「確認応答」が、自然に出てきている。
- (3) ③、④に見られるように、推測力や語学力等かなり高度な能力が必要である、複数の話者による「共同質問」がよく見られる。
- (4) 教科書用の創作会話とは異なり、完全な文として「質問」—「答え」というようになっているやりとりは、むしろ、ほとんどなく、ライン19、20、21の④⑤に見られるように、別の話者が「質問」の後半を受け取って「答える」、一種の「共同発話」が多い。

- (5) その他、ポイントに示したように、「復唱」「確認」「確認あいづち」「あいづち」「復唱確認」「確認応答」等々、聞き手としての「会話」への参加・貢献が顕著である。

これらは、いずれも、ACTFLのガイドラインによる「文レベル～文章レベル～複文章レベル」という談話構成の捉え方からだけでは、扱えない言語行動である。つまり、上記で見たような発話は、形としては、文になっていない「中途終了型発話」や「断片的発話」としか言えず、OPIの基準では、最もレベルが低いものとなる。しかし、談話の流れや、複数の相手の発話を即座に理解するだけでなく、時には、予測も交えながら、相手の発話を引き取って締めくくるといような、極めて高度な言語能力を要する言語行動である。このような、「聞き手としての言語行動」のプロフィシェンシーも、今後、評価に加えていく必要があるだろう。

このような現象の実態は、自然会話を分析してはじめて明らかになることである。このような自然会話分析研究により、機能的言語能力の指標として、単に「ある言語行動ができるかどうか」だけではなく、「ある言語行動を、会話というやりとりの中の、どこで、どのように行うことができるか」ということも、評価基準に加えるべきであるということが見えてくる。また、「伝達意図の達成度」、「ボライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」という3つの観点に、どのような要因がかかわっているかということについても、より具体的に、明らかにしていくことができるだろう。

このような談話研究を積み重ねていくことによって、特に、話し手と聞き手の相互作用性が強いとされる日本語におけるやりとりの実態を明らかにしていくことは、まさに、相手との相互作用としての「コミュニケーション」の総合的能力である「プロフィシェンシー」とは何かということを解明することにもつながる。もし、そうであるならば、それは、また、日本語教育に生かしていくこともできるだろう。

4. 談話研究の成果に基づく視点が、これからの日本語教育に貢献できること

最後に、シンポジウム共通課題の(3)「談話研究から得られた知見に基づく視点からプロフィシェンシーを捉えていくことは、これからの日本語教育、とりわけ、日本語の会話能力の研究・開発にどう貢献するか？」ということに触れたい。まずは、最も具体的で、実用的なアイデアとして、自然会話を教材化することによって、学習者が自然会話に特徴的なやりとりを理解し、また自らもある程度身につけ、自然会話の理解力と会話能力を向上させることに貢献できるということをあげておきたい。自然会話を素材としたビデオやWeb教材を開発することによって、スピーチレベルシフト、中途終了型発話、共同発話、共同質問、言いよどみ、笑い等々といった自然会話に特徴的な言語行動から、当該言語・文化における「ボライトネスの適切性」や「言語行動の洗練度」に関わる要因を探ることができる。自然会話を教材化することによって、学習者は、自然なやりとりの映像を見、どのような言語行動が「自然なのか」ということに「自ら気づく」ことができるようになる。教師側から見ると、学習者のタスク達成、機能を重視した上で、同じ機能を達成するにしても、その「言語行動の洗練度」を高めていくよう指導すること、つまり、「伝達意図の達成度」と「言語行動の洗練度」を、「ボライトネスの適切性」に注意しながら、レベルに応じて高めていくというのが、「プロフィシェンシーの教育」であるということになるだろう。残念ながら、これらについて、本章で詳しく述べる紙幅はないが、以下に自然会話を教材化することの利点を簡単にまとめておく。詳しくは、(宇佐美, 2007a, 2007b)を参照されたい。

<自然会話を教材として活用する利点>

- ① 実際のコミュニケーションの疑似体験ができる。
- ② 言語使用を非言語行動とともに学習できる。
- ③ 自然会話における重要なポイントを効率的に示せる。
- ④ ドラマなどとは異なる「普通の人々」のやりとりを見ることも、日本へ

の興味の喚起や、日本語学習への動機付けになる。

- ⑤ 母語話者だけではなく、間違いや、不自然な点も含む非母語話者の会話も見ることによって、学習者が、自身の言語行動に重ねて、振り返って考えることができる。
- ⑥ 教科書の日本語と自然な日本語との違いに気づき、意識化できる。
- ⑦ 学習者自身が学びたいことを自主的に選択し、考えていくことができる。
- ⑧ 学習者が必要としているにもかかわらず、教師側が気づいていない要素に、学習者自身が気づく可能性がある。

5. おわりに

今回は詳しくは論じられなかったが、談話研究には、グローバルな観点からの分析と、ローカルな観点からの分析の双方が必須である(宇佐美、2006d)。従来、プロフィシエンシーの評価は、時間的な制約があることもあり、ローカルな観点から行われることがほとんどであった。しかし、例えば、ある程度長い自然会話の中には、雑多な話題の談話の展開の合間に、例えば、「誘い談話」が複数回現れるというようなこともままたり、また、それをグローバル、ローカル双方の観点から分析することによって初めてあきらかになる知見もある(宇佐美、2006e)。自然会話では、様々な複数の談話の展開を踏まえた上で、あえて、前の談話における話題に戻ったり、改めて、前の談話で既に終わった「誘い」の確認をしたりするというようなことがしばしば生じる。また、「この間は、ありがとうございました」などと時空を隔てて前に戻って、礼が述べられるかどうか、というようなことさえある。これらのことができる能力も、「談話レベルからみたプロフィシエンシー」であり、「伝達意図の達成度」、「ボライトネスの適切性」、「言語行動の洗練度」のいずれに関しても、その1つの指標になりえるとも言える。今後は、このようなより長い談話レベル、及び、1つの会話を越えたマクロな観点から見る「オーラル・プロフィシエンシー」についても、この3つの観点から、なんらかの形で評価していく方法を探ることに取り組んでいく必要

があるだろう。

注

- 1 本章では、特に断らない限り、「プロフィシエンシー」とは、「オーラル・プロフィシエンシー」のことを指す。
- 2 宇佐美(2006b)では、「情報伝達の達成度」と呼んだものである。
- 3 宇佐美(2008)に示したものである。解説の詳細は、そちらを参照されたい。
- 4 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では、外国語学習教材として、17 言語において、40 の機能ごとに 40 のスキットを収録した会話モジュールをウェブ上で公開している。URL は次のとおりである。<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/>
- 5 本章では、宇佐美(2003a、2006c)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」を簡略化して示す。
- 6 ここで紹介する会話は、2005 年度に東京外国語大学大学院で行われた夏期集中講義(接触場面の教材化：鎌田修)の課題として学生が録画した会話である。収集者が協力者の承諾を得て会話場面を設定しているため、厳密な意味での自然会話とは言えないが、創作された会話とは違って、会話参加者の言語行動自体は統制されていない自然なものである。そのため、ここでは冗長をさけるため、これら「準自然会話」も含めて「自然会話」と呼ぶ。
- 7 スピーチレベルの使い分けは、「ボライトネスの適切性」や「言語行動の洗練度」にかかわる。そこで、グエンの発話が日本人にとって自然に聞こえるかどうかを、第二評定者をたて、本文に掲載していないデータの部分も含めたグエンの発話すべてを対象として、評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa)を算出した。不動産屋での問い合わせ会話の総発話文数は 107 発話あり、グエンの発話は 42 発話、分析対象となる発話(あいづちや挨拶を除き、敬体になる可能性のある発話)は 30 発話であった。敬体になりうるすべての発話について、敬体の場合と敬体でない場合でどちらがより自然と感じられるかを、2 人の評定者が個別に評定した。評定者間信頼性係数は、 $\kappa = 0.79$ であった。 κ が 0.7 未満であれば、コーディングの定義や分類方法等に問題があるとみなしたほうがよいとされている。また、0.75 以上は、信頼性が高いと見なしてよいとされている。(Bakeman & Gottman 1986)。

- 8 自然会話1(グエンのやりとり)の談話と、それに基づく議論については、同じ例を取り上げることもあって、宇佐美(2008)と重なる部分もあることをお断りしたい。
- 9 BTSJ では、ライン 67 は、ライン 69 と合わせて1発話文になると認定し、「発話文番号」は、ライン 67 は「67-1」、ライン 69 は「67-2」のように記す。そして、ライン 67 単独では、コーディングをしない。詳しくは、宇佐美(2006c)を参照のこと。
- 10 便宜上、BTSJ におけるライン番号と発話文終了の列は省略してある。
- 11 談話研究における「ローカルな観点」、「グローバルな観点」の重要性については、宇佐美(2006d、2008)を参照されたい。
- 12 評定者間信頼性係数は、 $\kappa = 0.85$ であった。

参考文献

邦文

- 鎌田修(2000)「日本語の会話能力とは何か—プロフィシェンシーの観点から—」シンポジウム「会話能力とは何か：その習得と教育」、『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会、17-22。
- 鎌田修(2005)「OPIの意義と異義—接触場面研究の必要性—」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ編『言語教育の新展開』、ひつじ書房、313-331。
- 関崎博紀、木林理恵、木山幸子、李恩美、施信余、宇佐美まゆみ(2004)「『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語2』の作成過程と整備の結果から示されること—会話教育への示唆—」、In Kawaguchi, Yuji, Susumu Zaima, Toshihiro Takagaki, Kohji Shibano and Mayumi Usami.(eds) *Linguistic informatics III: The first international conference on linguistic informatics—State of the art and the future—*, 21st Century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies(TUFS): 301-322。
- 宇佐美まゆみ(1998)「ボライトネス理論の展開：ディスコース・ボライトネスという捉え方」『東京外国語大学日本研究・教育年報 1997 年度版』、東京外国語大学日本課程、147-161。
- 宇佐美まゆみ(2001a)「談話のボライトネス—ボライトネスの談話理論構想—」『談話のボライトネス』、第7回国際シンポジウム報告書、国立国語研究所、凡人社、9-58。

- 宇佐美まゆみ(2001b)「ディスコース・ボライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がボライトネスの談話理論に示唆すること—『語学研究所論集』6、東京外国語大学語学研究所：1-29。
- 宇佐美まゆみ(2002)連載「ボライトネス理論の展開(1-12)」『月刊言語』31(1-5、7-13)、大修館書店。
- 宇佐美まゆみ(2003a)「改訂版：基本的な文字化の原則」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2) 研究代表者、宇佐美まゆみ(課題番号 13680351)研究成果報告、4-21 頁、2005 年 2 月 25 日に改定の最新版は、以下の URL から pdf ファイルをダウンロードできる。
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>
- 宇佐美まゆみ(2003b)「異文化接触とボライトネス—ディスコース・ボライトネス理論の観点から—」『国語学』、54(3)、117-132。
- 宇佐美まゆみ(2006a)「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較—「共話」、「Co-construction」現象の再検討—」『高見澤孟先生古希記念論文集』、高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会：103-130。
- 宇佐美まゆみ(2006b)「談話研究からの視点」『南山日本語教育シンポジウム プロフィシェンシーと日本語教育—日本語の総合的能力の研究と開発を目指して—』、関西 OPI 研究会、19-31。
- 宇佐美まゆみ(2006c)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2005 年 2 月 25 日版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、21-46。
- 宇佐美まゆみ(2006d)「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」229-243。
- 宇佐美まゆみ(2006e)「準自然場面における「誘い行動」の日韓比較—ディスコース・ボライトネス理論の観点から—」『日本研究』第 28 号、韓国外国語大学校日本研究所：47-72。
- 宇佐美まゆみ(2007a)「自然会話の教材化とディスコース・ボライトネス理論1：対人コミュニケーション論としてのディスコース・ボライトネス理論の考え方」『第一回ルーマニア日本語教師会—日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』、ルーマニア日

本語教師会, Avrin Press. 12-25.

宇佐美まゆみ(2007b)「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論2:教材としての自然会話の価値」『第一回ルーマニア日本語教師会 日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』, ルーマニア日本語教師会, Avrin Press. 26-38.

宇佐美まゆみ(2008)「相互作用と学習-ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗編,『講座社会言語科学 第4巻』, ひつじ書房, 150-181.

英文

Bakeman R. & Gottman J. M. (1986) *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. New York: Cambridge University Press.

Hadley, Alice Omaggio (2001) *Teaching Language in Context*. Third Edition. Boston, MA: Heinle and Heinle.

Suzuki, Takashi, Koji Matsumoto and Mayumi Usami (2005) An analysis of teaching materials based on New Zealand English conversation in natural settings: Implications for the development of conversation teaching materials. In Kawaguchi Yuji, Susumu Zaima, Toshihiro Takagaki, Kohji Shibano and Mayumi Usami. (eds) *Linguistic informatics -State of the art and the future*. John Benjamins Publishing Company: 295-315.

Usami, Mayumi (2002) *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Hituzi Syobo: 1-343.

Usami, Mayumi (2005) Why do we need to analyze natural conversation data in developing conversation teaching materials? -Some implications for developing TUFs language modules-. In Kawaguchi Yuji, Susumu Zaima, Toshihiro Takagaki, Kohji Shibano and Mayumi Usami. (eds) *Linguistic informatics -State of the art and the future*. John Benjamins Publishing Company: 279-294.

参考サイト

東京外国語大学大学院 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

TUFs 会話モジュール

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>

平成 17 ~ 18 年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成」プログラム

http://www.tufs.ac.jp/common/pg/gengo_yousei/index.html

宇佐美まゆみ(2003-2006)『談話研究と日本語教育の有機統合のための基礎的研究とマル

チメディア教材の試作』平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2), 研究代表者宇佐美まゆみ(課題番号 1532064)

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/kenkyukatudo.htm>